

idol books 18 for junior



● ジュニア文学名作選

● 壺井 栄

二十四の瞳

IDOL BOOKS

壺井 栄



著者との話
し合いによ
り検印廃止

アイドル・ブックス・18

二十四の瞳

発行・昭和46年4月5日 第1刷
昭和57年11月30日 第44刷 ©

著者・壺井 栄 つばい さかえ

発行者・久保田忠夫

発行所・株式会社ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京4149271番

印刷所・株式会社須藤印刷

製本所・島田製本株式会社

(落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします)

目次

二十四の瞳 ひとみ

四

りんごの袋 ふくろ

三四

伊勢の矢の日和山 いせ まとや ひよりやま

三七

解説

文芸評論家

古谷綱武

二九〇

年譜

三〇一

装 幀
さし 絵

福 原 幸 男
池 田 仙 三 郎

二十四の瞳

壺

井

栄

二十四の瞳 ひとみ

一、小石先生

十年をひとむかしというならば、この物語の発端は今からふたむかし半もまえのことになる。世の中のできごととはいえば、選挙の規則があらたまつて、普通選挙法というのが生まれ、二月にその第一回の選挙がおこなわれた、二か月後のことになる。昭和三年四月四日、農山漁村の名がぜんぶあてはまるような、瀬戸内海べりの一寒村へ、若い女の先生が赴任してきた。

百戸あまりの小さなその村は、入り江の海を湖

のような形にみせる役をしている細長い岬の、そのとつばなにあつたので、対岸の町や村へいくには小舟でわたったり、うねうねとまがりながらつづく岬の山道をしてく歩く歩いたりせねばならない。交通がすぐくふべんなので、小学校の生徒は四年までが村の分教場にいき、五年になってはじめて、片道五キロの本村の小学校へかようのである。

手づくりのわらぞうりは一日できた。それがみんなはじまんであつた。毎朝、新しいぞうりをおろすのは、うれしかったにちがいない。自分のぞうりを自分の手で作るのも、五年生になってからの仕事である。日曜日に、だれかの家へ集まって、ぞうりをつくるのはたのしかった。

小さな子どもらは、うらやましそうにそれをながめて、しらすしらすのうちに、ぞうりづくりをおほ

えていく。小さい子どもたちにとって、五年生になるということは、ひとりだちを意味するほどのことであつた。しかし、分教場もたのしかった。

分教場の先生はふたりで、うんと年よりの男先生と、子どものように若いおなご先生がくるにきまつていた。それはまるで、そういう規則があるかのやうに、大むかしからそうだった。

職員室のとなりの宿直室に男先生は住みつき、おなご先生は遠い道をかよつてくるのも、男先生が、三、四年を受けもち、おなご先生が、一、二年とせんぶの唱歌と四年女生の裁縫を教える、それもむかしからのきまりであつた。

生徒たちは先生を呼ぶのに名をいわず、男先生、おなご先生といった。年よりの男先生が恩給をたのしみに腰をすえているのと反対に、おなご先生のほ

うは一年かせいぜい二年すると転任した。なんでも、校長になれない男先生の教師としての最後のつとめと、新米のおなご先生が苦勞のしはじめを、この岬の村の分教場でつとめるのだといううわさもあるが、うそかほんとかはわからない。だが、だいたいほんとうのようでもある。

そうして、昭和三年の四月四日にもどろろ。その朝、岬の村の五年以上の生徒たちは、本校まで五キロの道をいそいそと歩いていった。みんな、それぞれ一つずつ進級したことに心はずませ、足もともかかったのだ。

かばんのなかは新しい教科書にかわっているし、きょうから新しい教室で、新しい先生に教えてもらうたのしみは、いつも通る道までが新しく感じられた。それというのも、きょうは、新しく分教場へ

赴任^{よにん}してくるおなご先生に、この道で出あうということもあった。

「こんどのおなご先生、どんなやつじゃろな。」

わざとぞんざいに、やつよばわりをするのは、高等科^{とうが}——いまの新制^{しんせい}中学生にあたる男の子どもたちだ。

「こんどのもまた、女学校^で出え出えの卵^でじゃいよつたぞ。」

「そんなら、また半人^{はんじん}まえ先生か。」

「どうせ、岬^{みさき}はいつでも半人まえじゃないか。」

「びんぼう村なら、半人まえでもしょうがない。」

正規^{せいぎ}の師範^{しはん}出ではなく、女学校^で出の準教員^{じゆんきやういん}（今では助教^{じきやう}というのだろうか）のことを、口のわるいおとなたちが、半人まえなどというのをまねて、自分たちも、もうおとなになったようなつもりでいつ

いるのだが、たいして悪気^{わるき}はなかった。

しかし、きょうはじめてこの道を歩くことになった五年生たちは、目をばちくりさせながら、きょう、仲間^{なか}入りをしたばかりの遠慮^{えんりょ}さで、きいている。だが、前方^{ぜんぽう}から近づいてくる人のすがたをみとめると、まっさきに、歓声^{かんせい}をあげたのは五年生だった。

「わあ、おなごせんせえ。」

それは、ついこないだまで教えてもらっていた小林^{こばやし}先生である。いつもはさっさとすれちがいながらおじぎをかえすだけの小林先生も、きょうは立ちどまって、なつかしそうにみんなの顔をかわるがわる見まわした。

「きょうで、ほんとにおわかれね。もうこの道で、みんなに出あうことはないわね。よく勉強^{べんきやう}してね。」
そのしんみりした口調^{くちやう}に涙ぐんだ女の子もいた。

この小林先生だけは、これまでのおなご先生の例をやぶって、まえの先生が病気でやめたあと、三年半も岬の村を動かなかった先生であった。だから、ここであつた生徒たちは、いちどは小林先生に教わつたことのあるものばかりだ。

先生がかわるというようなことは、本来ならば新学期のその日になつてはじめてわかるのだが、小林先生は、かたやぶりに十日もまえに生徒に話したのである。

三月二十五日の修業式に本校へいった帰り、ちやうど、いま、立っているこのへんで、別れのことばをいい、みんなに、キャラメルの小箱を一箱ずつくれた。だからみんなは、きょうこの道を新しいおなご先生が歩いてくるとばかり思っていたのに、それを迎えるまえに小林先生にあつてしまったのであ

る。小林先生も、きょうは分教場にいる子どもたちに、別れのあいさつにいくところなのであろう。

「先生、こんどくる先生は？」

「さあ、もうそろそろ見えるでしょう。」

「こんどの先生、どんな先生？」

「知らんよ、まだ。」

「また女学校出え出え？」

「さあ、ほんとに知らんの。でもみんな、性わるし
たら、だめよ。」

そういつて小林先生は笑つた。先生もはじめの一年はとちゅうの道でひどくこまらされ、生徒のまえもかまわず泣いたこともあつた。泣かした生徒はもうここにはいけないけれど、ここにいる子の兄や姉である。若いのと、なれないのとで、岬へくるたいいていのおなご先生が、一度は泣かされるのを、本校が

よいの子どもらは伝説として知っていた。

四年もいた小林先生のためなので、子どもたちの好奇心はわくわくしていた。小林先生と別れてからも、みんなはまた、こんどくる先生のすがたを前方に期待しながら、作戦をこらした。

「芋女うって、どなるか」

「芋女でなかったら、どうする」

「芋女に、きまっと思うがな」

口ぐちに芋女芋女といっているのは、この地方がさつま芋の本場であり、その芋畑のまんなかにある女学校なので、こないたずらな呼びかたもうまれたわけだ。小林先生もその芋女出身だった。

子どもたちは、こんどくるおなご先生をも芋女出ときめて、もうくるか、もう見えるかと、道がまがるたびに前方を見わたしたが、かれらの期待する芋

女出え出えの若い先生のすがたにはついに出現せず、本村のひろい県道に出てしまった。と同時に、もうおなご先生のことなどかなぐりすてて、小走りになった。

いつも見るくせになっている県道ぞいの宿屋の玄関の大時計が、いつもより十分ほどすすんでいたからだ。時計がすすんだのではなく、小林先生と立ち話をしただけおそくなったのだ。背中やわきの下で筆箱をならしながら、ほこりをたててみんなは走りつづけた。

そうして、その日の帰り道、ふたたびおなご先生のことを思いだしたのは、県道から岬のほうへわかれた山道にさしかかってからである。しかもまた、向こうから小林先生が歩いてくるのだ。長い袂の着物きた小林先生は、その袂をひらひらさせながら、

みように両手を動かしている。

「せんせえ。」

「おなごせんせえ。」

女の子はみんな走りだした。先生の笑顔がだんだんはつきりと近づいてくると、先生の両手が見えない綱をひっぱっていることがわかって、みんな笑った。先生はまるで、ほんとに綱でもひきよせているように、両手をかわるがわる動かし、とうとう立ちどまってみんなをひきよせてしまった。

「先生、こんどのおなご先生、きた？」

「きたわ。どうして。」

「まだ学校にいるん？」

「ああ、そのこと。舟できたのよ、きょうは。」

「ふうん。そいでまた、舟で去んだん？」

「そう、わたしもいっしょに舟で帰ろうとすすめて

くれたけど、先生、もいっぺんあんならの顔を見たかったから、やめた。」

「わあ。」

女の子たちがよろこんで歓声をあげるのを、男の子はにやにやして見ている。やがてひとりがたずねた。

「こんどの先生、どんな先生ぞな。」

「いい先生らしい。かわいらしい。」

小林先生はふつと思いだしたような笑顔をした。

「芋女？」

「ちがう、ちがう。えらい先生よ、こんどの先生。」

「でも、新米じゃろ。」

小林先生はきゆうにおこったような顔をして、

「あんなら、自分で教えてもらう先生でもないのに、どうしてそんなこというの。はじめっから新米でな

い先生で、ないのよ。またわたしのときみたいに、泣かすつもりでしょう。」

そのけんまくに、心のなかを見すかされたと思つて目をそらすものもあった。小林先生が分教場にかよひだしたころの生徒は、わざと一列横隊になつておじぎをしたり、芋女つ、とさけんたり、穴があくほど見つめたり、にやにや笑いをしたりと、いろんな方法で新米の先生をいやがらせたものだった。しかし、三年半のうちにはもうどんなことをしても先生のほうでこまらなくなり、かえつて先生が手出しをしてふざけたりした。五キロの道のりでは、なにかなくてはやりきれなかったのだろう。ころを見て、またひとりの生徒がたずねた。

「こんどの先生、なにいう名まえ？」

「大石先生。でもからだは、ちっちゃあい人。小林

でもわたしはのっぽだけど、ほんとに、ちっちゃあい人よ。わたしの肩ぐらい。」

「わあー」

まるでよろこぶようなその笑い声をきくと、小林先生はまたきつとなつて、

「だけど、わたしらより、ずっとずっとえらい先生よ。わたしのように半人まえではないのよ。」

「ふうん。それで先生、舟でかようんかな？」

ここが大問題だというようにきくのへ、先生のほうも、ここだなという顔をして、

「舟はきょうだけよ。あしたからみんな会えるわ。」

でも、こんどの先生は泣かんよ。わたし、ちゃんといつとしたもの。本校の生徒と行き戻りに出あうけど、もしもいたずらしたら、さるが遊んでると思つときなさい。もしもなんかいつてなぶつたら、か

らすが鳴いたと思つときなさいって。」

「わあ。」

「わあ。」

みんないっせいに笑つた。いっしょに笑つて、それで別れて帰つていく、小林先生のうしろすがたが、つぎの曲がり角にきえさるまで、生徒たちは口ぐちにさけんだ。

「せんせえ。」

「さよならあ。」

「嫁さん。」

「さよならあ。」

小林先生はお嫁にいくためにやめたのを、みんなはもう知っていたのだ。先生が最後にふりかえつて手をふつて、それで見えなくなると、さすがにみんなの胸には、へんな、もの悲しさがのこり、一日の

つかれも出てきて、もっそりと歩いた。帰ると、村は大さわぎだった。

「こんどのおなご先生は、洋服きとるぞ。」

「こんどのおなご先生は、芋女とちがうぞ。」

「こんどのおなご先生は、こんまい人じゃど。」

そして、つぎの日である。芋女出でない、小さな先生にたいして、どきどきするような作戦がこらされた。

こそこそ、こそこそ。

こそこそ、こそこそ。

道みちささやきながら歩いていくかれらは、いきなりどきもをぬかれたのである。場所もわるかった。見通しのきかぬ曲がり角の近くで、この道にめずらしい自転車が見えたのだ。自転車はすうっと鳥のように近づいてきたかと思うと、洋服をきた女が、

みんなのほうへにこっと笑いかけて、

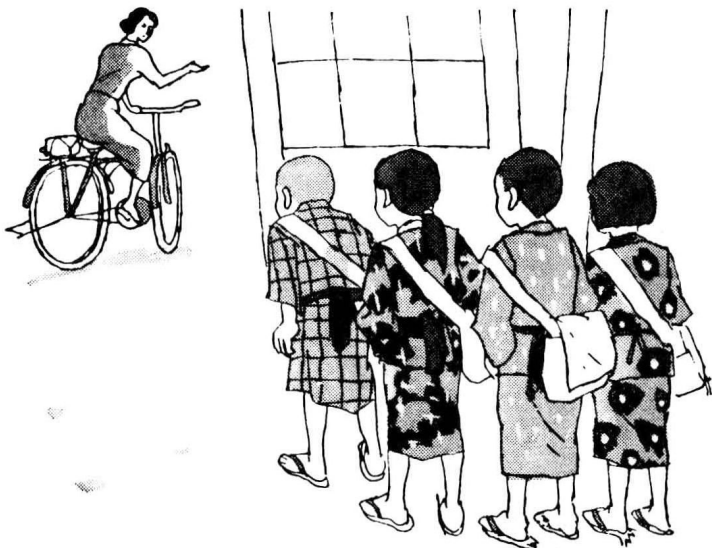
「おはようー」

と、風のようにいきすぎた。どうしたってそれは
おなご先生にちがひなかった。歩いてくるとぼっか
り思っていたおなご先生は自転車をとばしてきたの
だ。自転車に乗ったおなご先生ははじめてである。
洋服をきたおなご先生もはじめて見る。はじめての
日に、おはよう、と、あいさつをした先生もはじめ
てだ。みんな、しばらくはぼかんとしてそのうしろ
すがたを見送っていた。

ぜんぜんこれは生徒の負けである。どうもこれは、
いつもの新任先生とはだいぶようすがちがう。少々
のいたずらでは、泣きそうもないと思った。

「ごついな」

「おなごのくせに、自転車に乗ったりして」



「なまいきじゃな、ちっと。」

男の子たちがこんなふうに批評ひひょうしているいっぽうでは、女の子はまた女の子らしく、少しちがった見かたで、話がはずみだしている。

「ほら、モダンガールいうの、あれかもしれんな」
「でも、モダンガールいうのは、男のように髪かみをこのとこで、さんばつしとることじゃろ。」

そういつて耳のうしろで二本の指ゆびをはさみにしてみせてから、

「あの先生は、ちゃんと髪かみゆうとったもん。」

「それでも、洋服きとるもん。」

「ひょっとしたら、自転車屋じてんやの子かもしれないな。あんなきれいな自転車に乗るのは。びかびか光つったもん。」

「うちらも自転車に乗れたらええな。この道をすう

っと走る、気色きしよくがええじゃろ。」

なんとしても自転車では太刀打ちできない。しょい投げをくわされたように、みんながっかりしていることだけはまちがいがなかった。なんとか鼻をあかしてやる方法を考えたしたいと、めいめい思っているのだが、なに一つ思いつかないうちに岬みさきの道を出はずれていた。宿屋やどやの玄関げんかんの柱時計はしらどけいはきょうもまた、みんなの足どりを正直しやうじきにしめして八分ほどすぎている。

それ、とばかり、背中とわきの下の筆入れふでいれはいっせいになりだし、ぞうりはほこりを舞まいあがらせた。ところが、ちょうどその同じころ、岬みさきの村でも大さわぎだった。きのうは、舟に乗ってきたとかで、気がつかぬうちにまた舟で帰ったのをきいた村のおかみさんたちは、きょうこそ、どんな顔をして道を

通るか、その洋服をきているというおなご先生を見たがつていた。

ことに村の入り口の関所^{せきじょ}とあだ名のあるよろず屋のおかみさんときたら、岬^{さき}の村へくるほどの人は、だれよりも先に自分が見る権利^{けんり}がある、とでもいうように、朝の起きぬけから通りのほうへ気をくばっていた。

だいぶながらく雨がなかったので、かわいた表通りに水をまいておくのも、新しい先生を迎えるにはよからうかと、ぞうきんバケツを持って出てきたとき、向こうから、さあつと自転車^{じてんしゃ}が走ってきたのだ。おやつ、と思うまもなく、

「おはようございます。」

あいそよく頭をさげて通りすぎた女がある。

「おはようございます。」

返事^{へんじ}をしたとたんに、はっと気がついたが、ちょうど下り坂^{くだが}になった道を自転車はもう走りさつていった。よろず屋のおかみさんはあわてて、となりの大工さんとこへ走りこみ、井戸ばたでせんたくものをつけているおかみさんに大声でいった。

「ちよつと、ちよつと、いま、洋服きた女が自転車に乗って通つたの、あれがおなご先生かいの？」

「白いシャツきて、男みたような黒の上着^{うわぎ}きとったかいの。」

「うん、そうじゃ。」

「なんと、自転車^{じてんしゃ}でかいの。」

きのう入学式に長女の松江^{まつえ}をつれて学校へいった大工^{だいく}のおかみさんは、せんたくものを忘れて、あきれた声でいった。よろず屋のおかみさんは、わが意を得たという顔で、